

に漸次變化を生じ、庶民階級が國家社會の機構における一要素として擡頭進出するやうになつたのは、極めて著しき世態の變遷といはなければならぬ。

### 貴族政治の崩壊

ところでこの變化は庶民が自から覺醒して貴族に迫り、不當の特權を剝奪したといふやうな事情に因つたのではなく、實に貴族政治の制度自體の中から發生したものに外ならぬ。凡そあらゆる官階がそれぞれ貴族中の家柄の高下に從つて割當てられたことは、更めていふまでもなく、魏晉以來中正制度を採つた貴族政治の特徴であるが、貴族の間にも人格識見の優秀なものもあれば陋劣なものもある。それで家柄に應じて官吏を任用しながらも、なるべくは人物の優れたものを詮用したいといふ傾向の生じて來るのは當然のことであつて、それが遂に南北朝の末頃から、官吏詮考の方針として爲政者の間に認められることになつた。

しかるに人物を見定めて賢良の士を擢用するといふ方針は、門閥による任用の精神とは全く相背馳するものであつて、縱令當初はかくして貴族中より人材を擧用する方針なり實情であつたとしても、一旦人材擧用といふことに重要な意義を附した以上、その擧用の範圍が貴族以外庶民の階級中にも及んで行くべきことは必然の勢といはなければならぬ。隋の時に至つて科擧の制度が建てられ、試験の方法に依つて、士庶を問はず一般の間から人材を選挙することになり、公然と庶民の政治機關に携はる途の開かれることになつたのは、即ちかゝる勢の自然に到達すべき境地であつたと見なければならぬ。従つて貴族政治を崩壊せしめたものはそれ自からの作用に外ならぬのであ